

記憶や認知機能に関与

岐阜薬大グループ 世界で初めて証明

脳内遺伝子「DGKβ」

岐阜薬科大学の原英彰教授（薬効解析学）や神戸大学などの研究グループは14日、脳内で脂質を代謝する役割を果たす遺伝子「ジアシルグリセロールキナーゼ

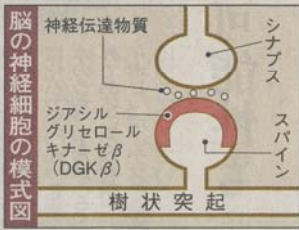
精神疾患治療、新薬開発に道

β（DGKβ）が、記憶や認知機能に深く関与していることを世界で初めて証明した、と発表した。同日付でアメリカのオンライン科学誌「PLOS ONE」に発表した。アルツハイマー病などの精神疾患を治療する新薬開発の手掛かりになるといふ。（吉岡隆博）



研究成果について発表する岐阜薬科大学の原英彰教授（右）ら
＝14日午後、岐阜市役所

DGKβは、学習や記憶の形成に重要な、脳の海馬と呼ばれる部分の「スパイン」の表面に多く存在。シナプスから放出される神経伝達物質などによる刺激を受けた際、細胞内で情報伝達を行う重要な働きを示す。研究グループは、DGKβが欠損したマウスをつくり、約3年間にわたって実験。DGKβが欠損したマウスは、通常のマウスと比較すると40%ほどの記憶力が低下していることを突き止めた。



は、記憶障害と関連するアルツハイマー病や、うつ病など精神疾患に深くかかわっている。研究結果は、精神疾患発症のメカニズム解析や、DGKβの増加や活性化に作用する新薬開発の突破口になると考えられる」としている。